

『おらが春』所収句全注解 (六)

黄色 瑞華

凡例

- 一 本稿は、『おらが春』所収句(一茶二三二、他三三二)の全注解である。
- 一 一行めに『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に()に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊸として、初出及び他書に所収の有無を注した。
- 一 句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一 注釈史上主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

〈承前〉

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花

一茶

㊸ おらが春初出

▽ 文化句帳(文化1・6)、「なでしこや時そこなひも月夜哉」。

注 「まゝはゝ」から「はゝ木々」(帯木)に言い掛け、

「日陰花」に自身の継子の境遇を寓す。「はゝ木」(帚木)、本来ホウキ草の別称であるが、ここでは信濃の蘭原にあって遠くからはあるように見え、近くではその形を見ることができないという伝説の木。『古今六帖』の「その原や伏屋におふるははきゞのありとて行けどあはぬ君かな」(坂上是則)から情があるように見えて真実のないことの意に用いる。暗に継母をさすことは言うまでもない。

解 帚木に陽光をさえぎられて、ひっそりと咲く撫子の花、の意。第八話後段の「我、又さの通り」を受ける。

▼ 勝峯『評釈』に、「いつくしみの手で撫でる母の愛、撫でられるその子のあまえ振り、天真な母子生活を象徴する撫子の名には、吸盤のやうな愛の引力を感じられるのである。あはれ、こゝに一輪の野撫子、はゝきゞの名こそ持て、あるかなきかの存在を古歌にも疑はれたその木かげに、生なさぬ仲の恵みも、いつくしみも、隔てさへぎられて、日蔭の花のやつれ萎みて、咲くとは名ばかりの不惑な一生にも似た、

我こそまゝ子一茶である。「考」は、木々は帚草であるが、こゝに新古今の恋一に『平定歌歌合にて』とあつて坂上是則の『その原やふせやに生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな』の古歌を踏んで、母とは名ばかりの意を寓し、又文政句帳には『蘭原やそのはらならぬはゝきゞに、住馴し家を掃出されしは、十四の年にこそありしか』と宿怨を述べてゐる」。川島『新解』に、「なでしこを子にたとえることは常套化している。それにままは木と言いかけて、ははき草を配したのである。箒草は枝葉が密生するので、なでしこは日陰となつていじけるといふ意で、本文を愛けた比喻である」。

朝夕に覆オヒかぶさりし目の上の

辛夷も花の盛り也けり 一茶

㊦ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・閏4)、上五「明暮に」。「辛夷」、仮名書き。

注 「目の上の瘤」から「辛夷」に言い掛け、自身を

寓す。

解 朝夕目の上の瘤のように邪魔者あつかいされてきた辛夷も、今は花のさかりである。

▼ 勝峯『評釈』に、「鬼のやうな目にかどを立て、いつも目の敵にして、窘め抜かれたので、この目の上に大きな瘤がかぶさつて、碌にうは目もつかへず、なみだをためた目で下ばかり見て暮したから、そのこぶに縁のあるこぶしの花も知らずに来たが、今はまゝ子、まゝ母で憎み、憎まれたのも因縁ごとゝ、すつかり諦めて見れば、この目を妨げる妄執もなく、こぶしの花の春をほしいまゝに咲き誇るのを、ころよく眺められるのである。こぶしの花盛りは憎まれものゝ栄える意にも取れるが、それでは『くるしみも平生とは成りぬ』の前書(注、本文末尾)を没却する」。川島『新解』に、「朝夕目の上のこぶのように邪魔であった辛夷も、今は花ざかりで一風情あると、なでしこの句(注、前掲)から転じて、妥協的な、やや悟りめいた口ぶりである」。

子ばかりの蒲団に芦の穂綿哉

山崎宗鑑

④ 未詳

注 孔門十哲の一人閔子騫びんしけんが継母にうとまれ、綿のかわりに芦の穂穂の入った衣を着せられたという故事による。『俳諧寺抄録』に、「歌連真二似たる人のいつはり／芦ノ穂ハかさねし衣の綿ならで」とメモ。三浦定環『野狩集』に、「あらかなしやな中のいつはり／きるものも芦のほわたや寒からん」。七番日記(文化11・10)、「惑人の着られし芦のほ綿哉」。「子ばかり」、母が添寝をしない、子どもだけの意に、「こればかり」(この程度)の意を掛ける。

解 幼児の蒲団、わずかばかりの綿を惜しんで、芦の穂穂を入れたことだ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「孔子の十哲、閔子騫の故事を詠んだのである。継母に憎まれて冬も綿ものは着せられず、芦の穂などを摘んで絮(わた)として、これで寒さを凌がせたと云はれる。此の句は秋の頃、水辺の芦の中から穂が抽んで、白い花の咲くを見て、

賢人の関子を疎んじ、まゝ子の関子ばかりに昔の穂を綿代りの夜具に寝させた、そゝまゝ母の非人情な虐げぶりを懐つて、無言の感慨を『哉』の詠嘆に託したのである。川島『新解』に、「子ばかり」は、母の添寝しない子ばかりの蒲団であろう。

竹の雪はらふハ風のまゝ子哉

正勝

㊸ 未詳

注 竹に降り積もった雪を払い落とす役目を継子に言いつけ、凍死に至らしめたという筋の謠曲『竹の雪』をふまえる。正勝は貞門系の俳人。

解 さつと風が吹き来て、孟宗竹の上に積った雪を払い落した。雪を払い落したのだから、この風は「風のまゝ子」なのだろう、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「降りつもる雪に竹は、くの字に撓つて折れるに垂んとるところへ、風が吹いて竹を揺り起し、その雪を払ひ落した景だけを詠んだのでは、貞門の俳諧に喜ばれない。雪はちよつと手を触れても、痺れるやうな冷たさである。その雪を払

ひ落すのはつらい勤めである。あの風はまゝ子であらう。まゝ子だから、あんな厭なつらい、雪払ひをいゝつけられて、手にしびをきらしてやつてゐるのだ。川島『新解』に、「謠曲『竹の雪』によつてゐる。夫の留守に、後妻が継子に竹の雪を払う役目を言いつけて、ついに凍死するに至らしめるという筋。竹の雪を払う辛い仕事をさせられているのは、風のまま子であろうの意」。

うつくしきまゝ子の顔の蠅打ん

紅雪

㊸ 嵐雪『其袋』

注 紅雪は美作の人。元禄五年没。『佐良山集』の撰がある。「うつくし」、ここでは「かわいらしい」「愛らしい」の意。

解 かわいらしい継子の寝顔に蠅が一つ。このときとばかりに継母は打たんとする、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「我が子、生さぬ子、分け隔てなくかしづき、もちなして行くものゝ、ふたり並べて、どう、ひいき目に眺めても我が子のかたが見劣

りされる。憎いより嫉ましきで胸一杯になる。此のまゝ母には身分もあれば良心もある。人間きも慎しまねばならぬ。妄りに醜い仕打ちもできない。たまゝくまゝ子の昼寝する顔を見て、憎し、嫉ましのこゝろの曇りに、こゝろの筈しほをとらへさせる。打たば今。蠅にかこつけて、その美しい顔へ、強い憎悪のひと打ち、とは思へどもかれこれ苦惱して、決しかねてゐるまゝ母の心理を解剖するかに見える句である。川島『新解』に、「美しい継子のねたましさ！あの寝がおを打ってやりたい、あの美しい寝がおを」。

なぜ、虫蚊さへ寝させぬまゝ子哉 未達

㊦ 祇園拾遺物語

注 未達は京の人、西村氏。貞門系。

解 そうでなくても安眠のかなわぬまま子に、もっと嘆けとばかりに蚊が寄りついている、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「昼は睨まれ、叱られ、あてこすられ、起つても坐るも疎む思ひで儘にならぬ。せめて夜だけは、足腰を伸ばして寝られるはずなのに、

蚊にせゝられて眠れない。蚊には害心はないのである。なぜ、ちくり／＼刺しに来るのか。辛辣なおもひやりのある蚊なのだ。それはまゝ子の境遇では昼はともゆつくり歎けまい。夜だけ存分に泣け、悲しめ、呪へ、それで睡らせないのである——と」。川島『新解』に、「昼はひねもすさいなまれ通して、せめて夜だけでものびのび寝ようとするのに、なお、身の上を嘆けと蚊がせせて寝せつけない。何と無情な蚊であることよの意」。

貞享四丁卯歌仙

葛の縄目をゆるされし文 (卜千)

まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて

芭蕉(風書)

㊦ 句餞別 (貞享四年十月興行)

解 前句、罪人の縄目を許す赦免状がとどいた。付句、それは罪人の継母が手を尽してくれた結果であった、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「前句は縄目の恥に逢つた者である。その縄を葛で絢つたものとあるので、辺鄙な

地方で縛られたことを意味してゐる。幸ひ嫌疑が晴れたか、それとも特別な事情があつてか。その罪をゆるして赦免する沙汰が届いたのである。此の前句には何んで縛られたのか。何うした理由で赦免状が発せられたかに就いて、第三者の想像的な解釈は控えねばならない。附句の作者の自由意志で何れとも決定されるのである。「附句は赦免された事情について想を構へ、縛られたのは継子と見て、世間の継母気質からは罪に陥しこそすれ。憎い継子に同情する筈がないのに、此の継母は生さぬ仲なるが故に、却つてその罪をかばひ、赦免方を訴へ出たので使者をさし立て、縄目を解かしめたといふのである」。川島『新解』に、「葛の縄目は葛の蔓でしばられることで、葛に秋季を持たせてある。後句は、前句の罪人を継子と見て、継母である嫁女がその子をかばつて、手をつくし心をつくして赦免されることを得た、という赦免事情に想を起したのである」。島居清『芭蕉連句全注解』に、「葛縄で縛られた縄目をとちかかして、赦免状が下されるとの意」(付句) 罪を犯し

た継子をいたわる継母の慈愛を賞でて、その罪が許されるとした。小説的背景

祇園拾遺物語

下部ひそかに首埋めける (松春)

継母の又口ばしる夜の雨

未達

④ 祇園拾遺物語

注 「祇園拾遺物語」、『俳諧』祇園拾遺物語並八雲見学京池

流亭松春撰。上下二冊。元禄4年板。

解 前句、下僕がひそかに人首を土中に埋めた。付句、

その首を継子の首と見て、継母は発狂し、継母は雨の夜その罪業を口走る、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「下部は家僕である。その手を借りて秘密に埋める首になまぐさく纏はるものは、主家に起つた不吉な纏れの、果は血のしたゝる悲劇のとばかりであらねばならぬ。後始末を引受けたその顔には、蒼白い顔を漂はせる惨虐性がある。連累者の一人、或は下手人であるやも測られない。此の前句の『ひそかに』が事件の鍵を握つてゐる。附句

は主家の妻に秘密が握られてゐる。彼女は後添ひである。下部を使噓して継子の寝首を掻かせたのであらう。かう先づ見定めてから、犯した罪への悶えと悔いことから、あの日から臉もあはぬ夜の苦しみ。たま／＼と／＼すれば、夢中にみづからを責めて、うは言に口走るのは寝首のゆくへである。川島『新解』に、「前句の所作を継母の指図と見て、後句は良心に責められる継母の狂態である」。

おく五歌仙

山木(こがれて)がくれて草に血をぬる 芭蕉

ワづかなる世を〔や〕まゝ母に偽られ 風流

㊤ つなぎ橋(文政2板)

注 「山木がくれて草に」、「つなぎ橋」には「山はこがれて石に」。原本、「山木かかくれて」。「か」を衍字として□で囲む。「世をまゝ母に」、「つなぎ橋」には「世をや継母に」。「風流」、出羽新庄の人、鈴木氏。

解 山は火に焼けこがれ、野辺の石までが人の血で染

められた。付句、あわれにも短い生涯を閉じたのは継母の謀略によるものだった、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「樹々の茂りに隠れて見えないが、神秘的な山がある。山には此の句の前に素英の『ふりにける石にむすびしめ縄』といふ、みしめ(注連)を張つた謎の石がある。もし、山にある石の卒都婆に血がついたならば、その時こそ山は崩れて、麓の家は潰れ、人は厭殺される——唐土の物語に似た口碑を恐れる村の者が、石のほとりの草を染める血を見て驚愕する。これが前句の趣向である。附句は山と石の怪異には触れず、その『血をぬる』から発想して、継子の横死に構図を転じたのである。山の中で殺される怨みの血のしたゝりである。無事で暮らしても、いくつ、いくらまで生きられるものでない。儂ない『わづかなる』世の中である。それだのに年若くして、継母の歎くところとなつて、殺害される無念さを以て変化を計つたのである」「(考)今昔物語の『姫母日見卒堵婆付血語』に基づく宇治拾遺物語の『唐、卒都婆に血付事』に『ふもとに

八十ばかりの女、一日に一度』かならず登山する。村のいたづら者が『血をあやして、そとばにぬりつけ』て戻つたところ、老婆は見て『とくにげのきて、いのちいきよ。このやまは、たゞいま、くづれて、ふかき海にならんとす』と、親々の遺言を村中触れ廻つたが信ぜられず、老婆一家が立退くと『空くらく、恐しく、山ゆるぎ』て、遂に山は崩れて海となり『これをあざけり、わらひしものども、みな死にけり』といふ説話が、芭蕉の腹案にあつて、此の前句となつたのであらうが、附句の継母に関することは、適切な説話と見受けない。川島『新釈』に、『評釈』の考のごとく、この句(注、前句)から芭蕉は宇治拾遺に見えるような妖異説話を思い起したのであらう。後句においては、草を血に染めた異変を継子の遭難と見たのである。『わづかなる世』は、世取りなどと同義語の所領の意と、人間一生の短い命と両様に用いてあるかと思う。継母の謀略のために命を縮められ、大したこともない所領を乗り取られたという意。島居『全註解』に、「いつの昔か山

神荒れて、山は火に焼け焦れ、野の草にまで人死の血が塗られたが、いまは注連はられた供養の石塔のみ残っているとした。(付句) いまだいとけなき年なるに、継母に偽られ苛められてむごい仕打ちを受けたが、その報いで山神の怒りにふれて、その継母は草に血をぬって命を落したとの意。

鶯よなどさハなきそちやほしき

小鍋やほしき母や恋しき 貫之娘

㊦ 袋草紙・清輔雑談集・西行上人談抄・宇陀法師・本朝文鑑

▽ 雑談集、「八ッに成娘歌よむ事」におらが春とほぼ同一の歌文を引くが、歌の作者名はない。西行上人談抄、この歌を引き「貫之が女九ここのへにてよめる也」。袋草紙・雑談集・西行上人談抄、第二句「などさはなくぞ」。宇陀法師・本朝文鑑にも見えるが、前者には「西行談抄、鶯よなどさなくぞ乳やほしき小瓶やほしき母や恋しき」、後者には「小鍋やほしき母や恋しき」。

解 鶯よなぜそんなに鳴くのか、乳がほしいのか、それとも粥の入った小鍋がほしいのか、母が恋しいのか。

▼ 勝峯『評釈』に、「歌の鶯は數うぐひすの名がある筈鳴きの頃であらう。冬ざれの餌の乏しさから、藪から垣のほとりへ、絶えずジュツと鳴いてあさつて歩くのが、継母の依怙なあつかひで、ご飯の鑑を見せびらかされて、いやが上にひだるさ(空腹)を覚えるその身に擬らへると、もに、筈鳴きの一羽きりなのを、みなし子と見て、生みの母さへそばにゐられたなら、この苦しみはあるまいといふところを、筈鳴きにも及ぼして母が恋しくてか、その乳がほしくて鳴くかと、ふたつに掛けて詠んだのである」。川島『新釈』に、「鶯よ、なぜそんなになくのか、乳がほしいのか、あの小鍋がほしいのか、それともお母さんが恋しいのかと、鶯に自分の思いを寄せたのである」。

我と来て遊べや親のない雀
六才 弥太郎

⑥ おらが春初出

▽ 文化句帳(文化5・1)、「わか草や我と雀と遊ぶ程」。七番日記(文化7・2)、「鳴よ〜親[な]

し雀おとなしき」。七番日記(文化11・1)、中七「遊ぶ(や)親の」。句稿消息、「八才の時」と前書して、中七「遊ぶや親の」。浅黄空、「親のない子は肩身でしれるなど、唄れ、心くるしく、うらの毛小屋に一人日なたぼこして」と前書して、「八、時」と添えてある。自筆本句集、中七「遊ぶや親の」。

解 おれのところに来て一緒に遊ぼうよ。ねえ遊ぼうよ。親にはぐれて一人ぼっちの子雀よ、の意。初出の「遊ぶや」に比し、「遊べや」という命令形には、遊び仲間を求める強い気持が表現され、主体の孤独感が強く出る。「六才」「八、時」は、幼児期を追憶して、の意。

▼ 吉田絃二郎、改造『俳句講座』に、「明和二年八月十七日母を失つて以来のかれはたゞ父弥五兵衛を頼りに生きてゐたが、父は多く留守勝である。遊ぶ子といつてはどれもこれも悪戯者で、中にも近村の

富右衛門といふ子は一茶より年上で大の悪太郎であり、一茶を見ては『親のない子…』をうたつて一茶を苦しめた。自然一茶は仲間をはづれて一人で稲村の蔭、田の畦にしゃがんでゐたらしい。『親のない雀』の一句そゞろに人の腸を絶つ。頼原『名作集』に、「三歳にして慈母を失つた一茶は、この『おらが春』の文に見えるやうな、誠に我が身ながらもあはれなその日くを送らねばならなかつた。その幼ない一茶の心に、親のない子雀の姿は、悲しくもまた親しいものであつた。彼はその悲しい親愛の情を、かうした言葉で呼びかけずには居れなかつたのである。この句『おらが春』に『六歳弥太郎』と署してあるので、世にはこれを一茶が六歳の時の吟と考へて居るものもあるが、すでに『若水帖』には『六歳の頃を思ひ出て』とある通り、これは六歳の当時の情を追憶して、遙か後年によんだものである。なほ、成美評一茶句稿には『八歳の時』と前書して、中七「遊ぶ親の」とある。これによると必しも六歳の時と限つたわけでもなく、単に幼時の悲しい生活を追

憶しての吟と見ればよい。暉峻『名句の鑑賞』に、「句意は解くまでもなく、親のないひがみから人交りをせぬ少年一茶が、淋しさの余り友を求めてゐるのです。勝峯『評釈』に、「母のいつくしみを知らない一茶は、親のない子とはやされるのを厭がつたらうが、父がある。祖母がある。かばひもすれば、可愛がつてもらへる。たゞ淋しいのは友達のないことである。睦しく餌を拾つてゐる雀の群れを、ちつと眺めてうらやましくも思へたらう。その雀へのよびかけが、親のない雀であつたのである。村のわんぱくから、のけ者にされるつらさは、あの雀にもこんな気持ちに沈むものがあつたから、きゆつと手を握りたいと思ひ詰めたことであらう。六歳の作で、ちつとも不自然でない」。伊藤『一茶集』に、「実は文化十一年五十二歳の頃、幼時を回想して作つた作で、それを幼時の作らしく装うためのものらしい。七番日記文十一年の条に、『我と来て遊ぶ親のない雀』と字足らずの形で見えて居るのが初出である。夏目成美に宛てた句稿消息には『八歳の時』と前書

があり、『遊ぶ親の』となつて居るが、此前書も八歳の時への追憶吟と解すべきであらう。川島『新解』に、「一茶の幼時の追想の中には、この句を生むにふさわしい思想の芽生えを探すことは出来たであらう。少なくとも、幼時を対象として客観する場合には、この句を成す素地は十分にあつたはずである。しかし、句のかたちを成していたかどうか、遠い昔のことなので、おそらく彼自らにも判然していなかったであらうし、判然せぬままに『遊ぶ親のない雀』というような未完成なかたちで書きつけて見たが、成美に示す時には『八才の時』という少々曖昧な前書を附して『遊ぶや』と句形を整え、更に『おらが春』に入れる時は『遊べや』と改作（句形は一段と整ったが子供らしさは次第に失なわれた）して、『六才弥太郎』と堂々と署名したものとと思われる。これを真に幼時の作と見る時には、親のない雀という認識が子供らしくなく、『我』という用語もまことしからぬ。荻原『新釈』に、「雀の中には自分のように、親のない雀もあるう、そんな雀は自

分の所に来て自分と遊んでくれないか、自分も淋しくて仕方がないのだから。加藤『秀句』に、「雀の子は黄雀ともいって春のもの、巣立ちののち一週間くらいして普通に飛べるようになるが、その前に折々巣から落ちてたよりなげに鳴いていることがある。

これは、そんな雀子に親のない自分の身を思い寄せて、呼びかけた作で、こういうたよりなげな生きものに呼びかける発想は、一茶の一つの特徴になつている。栗山『一茶』に、『成美評句稿』所収の句に冠した『八歳の時』はあたかも継母を迎えた年でもあり、きわめて自然な符号である。それをその後さらに二歳短縮して『六歳』と改めているのは、先輩の貫之娘や鬼貫（注、「こい／＼といへどほたるがとんでゆく」）に優越するための無邪気な作為といえよう。一茶の一面がここにも看取される。金子『一茶句集』に、「句意は至極明瞭で、へあの子雀には親がないようだな。おーい、こっちにこいよ、親なし雀。おれも親なしなんだ。いっしょに遊ぼうよ。なあ、遊ぼうよ。なあ、遊ぼうよ。」というこ

とだが。『遊べや』は、本州東部の方言『ペー（なになにだんペーといったいいかた）が織り込まれた、〈遊んペーや〉と受取る。したがって、〈おい遊べよ〉とか〈遊びなさいよ〉などといった、なんとなく見下したような誘いのことばとしては読まない。ましてや、〈遊びなされや〉、〈遊び給えや〉のような雅びた読みは御免こうむる」。宮坂『小林一茶』に、「小さい頃から賢い子ぶりを強調し、あわれさをだしたかったもの。『遊べや』は仲間を誘う信州の方言。しょんぼりとしている親なし雀やい、おれと一緒に遊べや。おれも親なしっ子だ」。揖斐『蕪村・一茶集』に、『遊ぶや』から『遊べや』への推敲によって、単に継子のみじめさを咄く一茶から、みじめさにめげず不幸な小動物へ呼びかける愛情深い一茶へと、一茶の自画像が転換していることも指摘できる。この句が一茶の代表作として多くの人々に愛されるようになった秘訣は、この推敲過程の中に見出すことができるように思われる」。

ぼた餅や藪の仏も春の風 一茶

㊸ おらが春初出

▽ 七番日記（文化11・1）、中七「地蔵のひざも」。

同（11・1）、「春風や地蔵の口の御飯粒」。浅黄空、

「立田」と前書して、「春風や地蔵の膝の赤の飯」。

自筆本句集、「春風や地蔵の膝の小豆飯」。希杖本句集、中七「辻の仏も」。発句鈔追が、中七「藪の仏も」。

解 暖かい春の風が心地よい。藪のまま子地蔵には今

日もぼた餅が供えられている。

▼ 勝峯『評釈』に、「われも継子、遠く守り仏に信仰しながら、ちつと思ひをはすれば、諸人の供へるぼた餅が臉に写りもする。肩をさすり、膝を撫で、こゝろよい春風に地蔵菩薩は今もお利益が存すであらう。一茶はまゝ子地蔵の前で詠んだやうに『大和立田村、継子をあはれみ飯喰ひし給ふ石地蔵にて』の前書に句は『辻の』で、後に成美の評を求めた。

（丸山盛雄氏蔵）——とすれば直接の迫力ある句にな

る筈だが、どうも思ひ出してつくつたやうな気がしてならぬ」。川島『新解』に、「本文とつかずはなれずの關係にあるので、一句としても、なごやかな情景が眼前する。まだ薄けぶりするほど出来たてのぼた餅に、そよらとわたる春風。民族的郷愁をそそるぼた餅の香に、藪の中の石ほとけもいきいきと目さまされてくる感じである」。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

一茶

〔出〕 七番日記（文化15・4）

▽ 七番日記（同前）、この句の一句前に「蚤の迹吹て貰てなく子哉」。

注 七番日記、同月の記事に「キク男子産ム夢」（二十五日）、「キク安産アリシ夢」（二十七日）。同五月の記事に、「四晴 柏原二入 キク女子生ム」。

解 蚤のあとを数えるように、そのからだに手をはわせながら添え乳をしている。待望の子出生の直前、そのような現実を夢見たのである。

▼ 川島『新釈』に、「母の乳房にすがりながら、腹

がけ一つで手足をバタ／＼させて居る子供。手枕をして乳房を嘸ませながら、『オ、斯んなに螫されてまア。』といふ風に、蚤のあとを掻いてやりながら一つ二つと数えて居る母。母と子との交渉が涙ぐましいまでに真実に迫つて居る。自分達もそんなにして育てられて来たのだといふことを思遣らせる」。

勝峯『名句評釈』に、「片手を枕に片手で乳房を含ませながら、柔かいわが子の肌をさすり／＼、お、お、家のいゝ子を蚤がこんなに食べてねと、蚤の迹を尋ねつゝある、全身の愛を子に注いでゐる母のやさしさ美しさは、人情美の極致であり、又この一句は俳句が表現し得る人情美の極致を代表的に詠んだと評して差支ない名句である。どんな人が読んでもすぐわかり、どんな人でもこの涙ぐましい愛情に感動せぬ人は無いであらう」「度々述べる通り句帖の句が必ずしも上欄の日記と一致するのではなく、恐らくさと女が生れてからの作であらうと思はれる。仮にさうでなく想像の句としても、これは人間の事実であるが故に、実感実見ではないからとて句の価値

をさげはせぬ」。暉峻『名句の鑑賞』に、「まだ若い母親が、片手を枕にし、片手で腹掛一つの子供に乳房を含ませながら、『うちのお宝をこんなに食べてねえ』と、蚤のあとをおさへるやうにしてゐる。文句なしに領かれる美しい母の愛情であります」。勝峯『評釈』に、「むづ痒がる肌にはぼつり、赤いふくらみがある。蚤である。憎いやつだ。又ぼつり、いたくしく腫れてゐる。ちよつと寝せつけて置いたのに、いつ喰つたのだらう。背中からずつと撫で、擦すつて、口を尖らしながら、かぞへ立てる菊女の添乳ぶりを『これは句になるぞ』と、一茶はちつと眺め入つたのである」。伊藤『一茶集』に、「さと女出生前の作で、これを転用（注、おらが春第十四話に）したのである」。川島『新解』に、「母の乳房にすがりながら、腹がけ一つで手足をばたばたさせている子、手枕して乳房をふくませながら『一つ二つ三つ四つ、まあこんなに螿されてかわいそうに』と、蚤のあとを撫でてやっている母。俗世における無風帯の母と子だけの世界である。そして、父親である

一茶は最も幸福な傍観者でなければならなかった」「行脚中も夢に見るまで子の出生を待ちかねていたのであったから、この句のような情景には殊更心を引かれたであろう。それが一年を経て、さと女の愛の記と共に身辺句として生かされて来たわけである」。中島『一茶集』に、「子どもに乳房をふくませながら、蚤に刺されたあとを数えている母親の、満足そうな様子」。加藤『秀句』に、「この句は『七番日記』文化十五年のところにある。したがって元来はさと女とその母を題材にしたものではなく、ここでは転用したものであろう。一茶にはそういうことがかなり多いのである」。宮本『大観』に、「前文と相まって、いっそう母親らしい人情が捉えられている。添乳をしながら幼児のやわらかい肌に赤く残っている蚤の跡を数えて、かわいそうにと撫でている情景が目にかんでくる」。丸山『秀句選』に、「手枕して、子に乳房を含ませながら『まあ、こんなに刺されてかわいそうに』と、蚤の刺しあとをなでてやっている母親の姿は、いかにもしあわせそのものである、

という意」。

柳からも、んぐあゝと出る子哉

〔一茶〕

㊦ おらが春初出

▽ 七番日記(文化10・3)、中七「も、んぐわとて」。

注 「も、んぐあゝ」、ムササビの一種。猫に似て、前後肢の間の肉翅によって、樹上から滑降して小動物を捕る。夜行性で、その鳴声は「ギャア」と不気味。

『おらが春』第十二話の本文の後に、「より／＼思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ」として、以下の十一句が収めてある。

解 夕暮、元氣のよい男兒が、はんでんか袖なしでも頭にかぶって、「ももんがあたぞお」と木陰から飛び出して、女兒などが悲鳴をあげるのをおもしろがったのである。幼兒の悪戯を描写したというだけではなからう。一茶が「心寄せ」たのは、そこにある生き生きとした人間そのものの姿であった。

▼ 勝峯『評釈』に、「柳がある。青く繁つて垂れてゐる。こどもが蔭にすくんで窺つてゐる。それとも

知らずに二三人のこどもが遊んでゐる。隙を見て柳のかけから『も、んぐあゝ』と不気味なつくり声で跳り出る。驚いたこども達は『そら出たッ』と一散に逃げて行く。こちらでは『やあい、だまれた、やあい』と、おどして置いて囃し立てる。街上のこども風景である。川島『新解』に、「しつとりと垂れ下っている柳の中から、それをふりかぶるようにして、両手をたらしして『ももんがあ、化けエ』と不気味な作り声を出してくる。おどされた子供たちが、うわゝと飛び散る。柳は相変らずもっさり垂れている」。

蓬萊になんむ／＼といふ子哉

〔一茶〕

㊦ おらが春初出

▽ 七番日記(文化8・1)、中七以下「南無／＼といふ童哉」。我春集、「南無／＼といふ子供哉」。浅黄空、自筆本句集、座五「いふ子哉」。

注 「蓬萊」、正月の床飾。蓬萊飾。

解 幼兒が、正月の床飾に向つて、「なんむなんむ」と手を合せているのである。一茶が「心寄せ」た

のは、幼にして仏性をそなえた子の姿であった。

▼ 勝峯『評釈』に、「きつとなつて見据ゑる。小さな手を揃へる。おや、どうしたのだといふかる。目を閉ぢる頭をさげる。は、あ解つたぞとうなづく。

あごを延ばして『な、あ…ン』で、息をのんでから『…む』と軽く結ぶ口が、ふたゝび綻びて『な…ん…む』へ繋がり、ないやかな余韻を引く。『お、でかした、でかした』と褒める大人は、句外へ遠慮させて、天真なこどもの声だけを描写する。蓬萊に向つて仏檀の思ひで、念仏をあげることもの世界である。川島『新解』に、『いけませんよ、のの様ですよ』などたとしなめられると、子供も改まった飾り物に何やら敬虔の念をさそわれて、なんむなんむと小さな手を合せる、かわいい光景である』。

年間へば片手出す子や更衣 [一茶]

㊤ 七番日記 (文化15・4、12)

▽ 七番日記、上五「としとへば」。同 (文化12・7)、

「としとへば片手広げる棚経哉」。

解 坊やお年はいくつ、と問うやいなや、ぱっと片手のひらを広げて見せたのである。すくすくと順調に成育している男の子である。

▼ 勝峯『評釈』に、「人の家を訪問する。ちよこくくと来て坐る。人見知りをしない、あどけない顔である。そんな時のお愛想には「坊やいくつ」が極つてゐる。はにかんで爪などかまない。その小さい手をあげて開いて見せる。拇指を折るか、も一つかさねるか、三つ四つの頃である。口より手の返事のこれも極つた型である。季節の感じにびつたり一致する。この更衣の語が誰にも出るとは云へない。一茶でなくてはそこへ目が届かぬ。川島『新解』に、「さっぱりと袷に着がえたはずんだ気分でパツと片手を開いて見せる子、これは論なく男の子の祝はれの年でもある。得々たる子供のつぶら目が見える」。

小児の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初給

[一茶]

④ 七番日記（文化13・三、四）

▽ 七番日記（文化11・4）、「金時がてんつるてんの
袷かな」。

解 なんとたのもしきことだ。縫上げをした袷から手足がよきつとはみ出しているではないか、の意。母親がこれを着せるころにはこれくらいの丈にと、縫上げをしておいたのだったが、この子は母親の予想をはるかに超える成長をしていたのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「踝（くろぶし）から膝へ何寸かのところ。付紐がみづおちの辺にあたるのが、てんつるてんの着丈であらう。此の初袷は仕立おろしではない。去年も着せて、その時は、ゆきも、たけも揃つて、とうどよかつたのである。『こんなまあ』の驚きより、一年でぐんと、かうまで伸びて行く、その育ち振りに『頼母しや』の感嘆が強いのである」。川島『新解』に、「この初袷は更衣の意で、新調ではない。去年の袷が滑稽なほど短くなつてしまったのである。この時ほど小児の成長をまざまざと見せつけられることはない」。

名月を取つてくれろとなく子哉 〔一茶〕

④ 句稿消息

▽ 七番日記（文化10・8）、「あの月をとつてくれろと泣子哉」。

解 八月十五夜の月、あの美しい月がほしい、取つてくれとせがむ子である。美しいものにあこがれ、心うごかす幼児。

▼ 黒沢『研究』に、「明月の明るさ——世界中を照らすと思はれる鏡のやうな——を見て、あれが欲しい、取つて呉れとせがむ子があるといふのであります。少し技マヤ工に走つたと思はれるが、先ず有名な句で人口に膾炙するところです。あながち斯く云つたのではないとしても子供に対して、さもかやうなことが、あらうかといふ所に、いよ／＼空に名月の明らかに懸つてゐるといふことを鮮かにおもはしめるものがあります。『呉れる』といふやうな俗な言葉を用ひて、決して俗に墮せず或る詩境を描いてゐるのは、いつもながら一茶の精進にあることを嬉しく

考へられます」。勝峯『名句評釈』に、「心理学者に聴くまでもなく、幼い者ほど距離の認識が欠如してゐる。何千万里か彼方の月も子供には屋根のすぐ上にしか思はれない。背中の上で足を踏ん張つて、あの月がとつてほしいとは当然の欲望である。児童心理学の好例句である。この句ほど人口に膾炙してゐる句も稀であらう。一茶の作であるかないかを知らずして口ずさまれる程一般的になつてゐる句である。内容が普遍的なものだからである」。暉峻『名句の鑑賞』に、「子供の時分に、お月様を拝んだり、欲しがつたりした経験は、我々も持合せてをります。漸く片言をいひはじめて、玩具の欲しくなつた時分の子供に名月を拜ませると、手をさし延べてとつてくれとせがんで泣く、児童心理の好例句として人口に膾炙してゐます」。勝峯『評釈』に、「見るものを欲しがる。やればすぐ飽きて、外のを欲しがる。本能的な私慾の発芽である。何んでも欲しがるあげ句が、天上の月へ。これは一茶の奇抜な着想である。必しもこどもがせがみ望んだのであるまい。『泣子

と地藏（てんざう）にはかてぬ』この諺から出た『なく子』である。ほんとうに足擦りをして、あの月をくれるとまで、駄々をこねるこどもがありさうもない。実際にそんな子があつたら今太閤にならう。川島『新解』に、「常識の世界を超えている子供にはかなわぬと思うが、それでも、まさかと首を傾けさせられる」。

子宝がきやら／＼笑ふ槽火哉

〔一茶〕

㊦ おらが春初出

注 「槽」、木の根もとの部分。割木にしにくい太く堅い部分。囲炉裏にはそのまま入れ、割木を添えて焚く。

解 夜分、囲炉裏を囲んで暖をとっている。灯火はな。火箸で繕うとしたか、添えてあった薪などが燃えくずれたか、一瞬火の粉が舞いあがり、ぽっと明るくなった。同時に闇に浮びあがった幼児の顔から、「きやら、きやら」という笑い声が発せられた。子どもを囲む一家の団欒である。

▼ 勝峯『評釈』に、「窓を塞ぎ隙き間に目張して、

冬の農家は夜でなくとも暗い。土間に近い部屋に大きな炉を穿つて、槽を投げ入れてどん／＼焚く。その明りが天井へ、壁へ、映つて夜は灯りの代りにもなる。燻ぶる槽がぼつと燃える。そんな時に面白がつて、手をたゝいてこどもが笑ふ。鍋のものが吹きこぼれでもしやうものなら、わい／＼はやす、その情景である。貧しいながらも、此の子ひとりやうに大事がる生活が写されてゐる」。川島『新解』に、「神事その他の儀式に火をつかうことが多いが、パッと炎のもえあがる勢は、鬱結した人の心を解いて明るく清浄にする。感受性の強い子供は反射的によろこびの高声をあげるのであった。煤けた天井、煤けたごさ畳をはさんで、炉をかこむ親子の顔々、殊に、槽火に照りはえた健康そうな子供の顔いっばいの笑いが目に浮ぶ。『きやら／＼』の擬声語も一茶の独創らしいが、神経質な子供の笑い声がよく響いている」。

あこが餅／＼とて並べけり

〔一茶〕

④ 七番日記（文化10・12）

解 餅は正月雑煮用の切餅であろう。母親であろう人物が短冊形に餅を切る。その後から、「餅／＼」と言つて並べているのである。働き者になるだろう身軽な女の子である。

▼ 勝峯『評釈』に、「この餅のひとつ／＼が並べる子の性格を反映してゐる。切るそば／＼から持つて来る。ひとつ並べては所有権を宣言する。それも家もの、制止もしなければ叱りもしない。なごやかな家庭である。その餅のねばり強さで、自由を愛する童心は、無干渉に伸びて行くのである。あこの烙印が切餅のひとつひとつに押される。そこに家庭的に自由な性格が閃いてゐる」。川島『新解』に、「餅とばかりでは季感が薄い、これは歳暮の切り餅であろう。子供——人間はと言いかえるべきであろうが——欲張りなものである。これもあたいの、これもあたいの、と、あるほどの餅を、べたべたと畳の上などに並べ歩いている三四歳になる女の子のすがたが眼前する。それをきたないものと叱りもせ

ず、するがままにさせておく親馬鹿の幸福感。とは云え、これも客観句で、七番日記文化十年十二月の部に見出せる。」

妹が子の背負^③ふた形リや配餅
〔一茶〕

③ おらが春初出

▽ 八番日記(文政2・4)、上五「妹の子の」。句稿
消息(文化11)、「妹が子は餅負ふ程に成にけり」。

注 「配餅」、満一歳の誕生日を祝う配餅であろう。

解 「この子の祝でございます」と、満一歳を迎えた
背中の子の祝餅と配って行く、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「枕をおぶう、紙帯をおぶう、何んでもおぶひたがる。そのしよひ癖が板について、しやんとした歩き振りである。餅は人形よりずつと重いので、ころげでもしたらと、氣遣つて見送る顔が、ほく笑ましく綻びるその姿である。のし餅をせいぐ一枚がところ、あぶなげなく配つて来る女の子の風俗的な写生である。『形リ』は餅のかたちが、おぶはれたなりに歪むか、まがるかしたと見られな

いでない。そこまで穿たないがよいやうに思ふ」。

川島『新解』に、「わが愛する女の子、すなわち我が子といふことになる。ようやく歩くほどになった子に、力以上の餅を背負わせて、わが子の生育をほこる親心である。うしろへ引き戻されそうに、よろよろと、あぶなかしげなかつこうが、『背負ふた形リや』と、感動をこめた中七に暗示されている」。

餅花の木陰にてうちあは、哉
〔一茶〕

④ 七番日記(文化10・10)

▽ 七番日記、上五「餅花(の)」。

注 「餅花」、餅つきの日(十二月二十八日)、木の枝につきたての餅をつまんで付け、木に花が咲いたようにしたもの。これを柱にくくりつけておく。普通は二十日正月に煎って食べる。『日次記事』に、「兒女貼^{リッテ}三小丸餅^ヲ於枯條^ニ而玩^ヲ之謂^ニ餅花^ト」(十二月)、
「民間旧臘所^レ造^ル之餅花再^ヒ製^ス之供^レ仏^ニ」(二月十五日)。
解 ふだん大人たちに求められても、なかなか応じようとしなかったこの子は、餅花を飾った家の中の姿

化に、ひとり「てうち、てうち、あはは」と、はしやいでいるのである。いたいけな子。

▼ 勝峯『評釈』に、「柳の枝を柱を支へた天井へ這はせて、枝にねばりつけてある小さい餅が、花の咲くやうに垂れてゐる。その下を木陰と見立てたのである。軽く二度ばかり手を柏つて（てうち）愛嬌にその手で、額をたゝいてから口を覆ひ、息を出すはづみに手を震動させる（あはゝ）戯れは、ひとりで起きあがり、坐つて倒れない頃のこどもを快活にさせる。大人の伝授をすつかり覚えて、あやせばすぐやつて見せて、きやらゝ笑ふ正月のこれも家庭風俗である」。川島『新解』に、「花の縁で木陰と言つたのであるが、事実、枝垂れた餅花の飾つてある柱の下にえんこさせられている子が、余念なく、ちようちちようちあわわをやっている姿が、美しくかわいく印象的である」。

涼風の吹く木へ縛る我子哉

〔二茶〕

④ 七番日記（文化13・3、5）

▽ 七番日記、中七「吹木へ縛る」。

解 子持ちの農婦が、野良仕事のために乳飲み子をつれ出し、木陰にわが子をつないでいるのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「面と向つて我が子を折檻することもならぬ、臆病に過ぐる弱い親のころである。よくよく耐へられない、わるさを仕出かしたと見えて、あの木へ縛たのらしい。どうせ懲らしめのためならば、どの木、この木と選ばずともよい。庭木の西日のさすところだつて構はないであらうに、わざゝあの木蔭の暗い樹に縛つたのは、大地が冷えるばかりに繁つて、風通しもよく、涼しさ此の上ない樹だからであらうではないか。勿体ない親心だ。一茶は傍観者である。第三者としての感想を述べた句である」。川島『新解』に、「子供に対して所有感の強かった昔の親は、ずいぶんとひどい折檻をやつたし、子供はまた手におえないいたずらをやつたようである。この句は、こらしめのために木にしぼりつけながらも、親心で、涼しい風のふくところに選むといふのであるが、理におちたところが鼻につく。

これも旧作であるが、机上の案であろう。

ワんぱくや縛られながらよぶ螢 [一茶]

㊤ 七番日記(文化13・3、6)・句稿消息

▽ 七番日記(文化13・5)、上五「泣蔵や」。同、座

五「夕涼」。

解 「わんぱく」小僧、目にあまる悪戯にその親は庭前の木に荒縄でしばりつけたのだったが、親がその場をしりぞくやこの悪童は許しを乞うて泣き続けるどころか、「ホ、ホ、ホタルコイ」と螢を呼んでいる。

▼ 勝峯『評釈』に、「不敵なわるさを平気でやる。

腕白の性格である。わんぱくだから親に縛られたのだらう。縛られながら螢を呼ぶからわんぱくである。循環論法のやうだが、わんぱくを定義すればさうなる。懲らしめの縄にかゝつた時は泣きもし、口惜がり、しほれもしたらうが、ちきに忘れて、日暮になつてもけろりとしてゐる。螢が光る。来い／＼ほうたる、ほうたる来い。縛られた手でつかまへるつも

りなのだ。始末におへない腕白である」。川島『新解』に、「前句(注、「涼風の」)を子供の側からよんだような句である。これもどうかと思う。もしこのような不敵な子供がいたら、よかれあしかれ末おそろしい」。

考 「柳から」の句、そうした子供の戯れを描写したというだけでは不十分。一茶が「心寄せ」たのは、そこにある生き生きとした童児そのものの姿である。以下の十句、いずれも子供の姿を題材としたものだが、それは身の動きをとらえただけでなく、それぞれ動きの中に、人間本来のはつらつとして、すがすがしい本態を見て、それを讚美しているのである。愛娘の「遊び連に」というのであるから、影響を受けたら困るような存在は除外されて当然であろう。「蓬萊に」の句にしても、正月の床飾りを解説するばかりでは一句の解にはならない。小さな手を合わせて「なんむ／＼」というその姿をとおして、「仏性」をそなえた子供のすがすがしい姿にふれたのであって、そこに一句の創作動機があったのだ。「年

問へば、「この句において「更衣」の季節にこだわ
る必要はなからう。新しい着物に着せかえてもらっ
ている子が、第三の人物に「いくつ」と問われて、
何のためらいもなく、片手をぱっと広げて答えたの
である。それが何を言おうとしているのか、そんな
詮索など全くなしに、ほとんど反射的に、手をぱっ
と広げて応える。「心のうち一点の塵もなく、明月
のきら／＼しく見ゆれば、迹なき俳優見るやう」
(本文) な一瞬であった。「たのもしや」、この裕を
着るころには、これくらいの丈になっておいた、その丈が
と、見当をつけて縫い上げをしておいた、その丈が
「てんつるてん」になってしまっていた。親の予想
をはるかに超えた成長ぶりに、母親が感じたもの、
それがこの句の主題である。「名月を」、「大人の思
いよらない難題」(古典文学大系、川島の注)、一茶
はそれに「思ひ寄せた」のだろうか。また、さと女
にそんな奇抜な欲求を持つような子に育ってほしい
と望んだのだろうか。そうではなからう。「名月を
取つてくれる」とせがむ、その難題を超えたところ

で、美しいものに心動かす子を見たのである。「蓬
菜に」は幼にして仏性をそなえた子、「名月を」は
幼にして美しいものに心動かす子であり、一茶がわ
が子にもそういう影響がほしいとして、「爰に集」
めたのだった。

「子宝が」、冬の夜、一家が囲炉裏を囲んで暖を
とっている。無用の灯火は消してある。だけれが、
火箸で炉の火をつくろったのか、その瞬間、火の粉
が舞いあがり、「きやら／＼」という小児の笑い声
とともにその顔が闇に浮びあがったのである。幼児
を囲む一家の団欒が主題である。『寛政句帳』で、
「外は雪内は煤ふる栖かな」(寛政4)と詠んだ、そ
の世界である。「あこが餅」、「あこが」で切って
「餅／＼とて並べけり」と読む方が作者の表現意図
にかなう。「あこ、すなわち「かわいらしい童女」
が、「餅／＼」と口にしながら、伸し餅を並べてい
く。これは勝峯が言った「所有権」の宣言などでは
なく、餅そのものに心引かれ、興奮し、はしゃいで
いると見てよからう。一茶はその身軽な動きに、働

き者になるだろうこの子の将来を見たのである。だからこそ、わが子に影響を与えてほしい子供の一人として、「爰に集」められたのだった。「妹が子の」、「配餅」は、多く何かの祝いのためについた餅を近隣・縁者などに配ることを言う。年末以外にはめつたに餅をつくことがないから、何かの折にそれをつくことがあれば、めずらしいものとして隣近所に分ち合った。ここでは満一歳の誕生を祝う餅と見ておきたい。「背負ふた形り」は、「背負うたまま」の意であろう。「妹」(母親)が、満一歳を迎えたわが子を背負ったままで、「この子の祝でございます」と餅を配って行く。健康で順調に育っている子である。「餅花の」、普段おとなたちが「ちょうち、ちょうち、あわわ」とやって、そのままを求めても、なかなか応じようとしないう子が、室内に飾りつけられた餅花の下では、みずからすすんでそれをくり返している。家の中の変化に興奮して、はしゃいでいる。いたいけな子、そればかりではない、ものに触れて心動かさずにはいられない子である。

「涼風の」、勝峯・川島とも、「木へ縛る」から「折檻」と感じ取り、さらに「涼風の吹く木」から「親心」を連想している。「涼風の吹く木へ縛る」のは、親心のなすところだが、「木へ縛る」のは「折檻」のためではない。農婦が乳呑み子を野良仕事につれて出たとき、藁製のつづらに入れて田の畦などに置いた。それがよちよち歩きをするようになると、子供の腰に綱をつけて、傍らの樹木などにつないで仕事をすする。「乳呑子の風よけに立かゞし哉」という句もある。一茶が「思ひ寄せ」たのは、野良仕事に連れ出され、ひとり遊びをするような、そんな健康児の姿であった。「ワんばくや」、悪戯をはたらき、そのために庭前の樹木に縛りつけられた悪童。ひとしきり大声をはりあげ、わめいていたが、やがて眼前を飛び交う螢に向かって、「ホ、ホ、ホタルコイ」と呼びかけている。農家の男児、それも眉のつりあがったきかん坊が主体である。一茶はその「元氣」に心ひかれたのであり、わが子にも一面において、そんなところがほしいと願ったのである。

再三述べているように、一茶がわが子の「遊び連れにも」と、集めた十一人である。最愛のわが子の遊び連れ、それを親として選ぶのであるから、まず考えるのは、その遊び連れからどんな影響を受けるかということだ。「柳からも、んぐあゝと出る子」、「縛られながら」「螢をよぶ子」の元氣、「年間へは片手出す子」「てんつるてんの初拾」を着せてもらっている子、母の背におんぶされながら餅を配ってあるく子の成育ぶり、「名月を取つてくれる」と美しいものに心動かす優しさ、榎火の火の粉に「きやらく笑」って、一家団欒の中核となるような明るさ、切り餅をせっせと並べる身の軽さ、「餅花の木陰にてうちあはゝ」を続けるいたいけさ、野良仕事に連れ出され、ひとり遊びができるような丈夫さ、というようなものに一茶は「思ひ寄せ」ていたのだ。

ここに集められた十一人の子供は、いずれもきわめて個性的な子供である。したがって、それぞれの個性は互いに相入れないものばかりである。作者は

それを承知の上で、いずれからも影響を受けてほしいと願うのである。

わか子の「遊び連れにも」と、十一人の個性的な子供を集めた作者の意図は、実はそれによって、恩愛の情の真相を語ることにあった。親が子に対する期待とは、恩愛の情とは、かくも複雑にして矛盾にとんだものだ。そして、「其引」として次にあげる貞徳以下の句は、それが個人を超えて人間共通の世界であるとすることの傍証である。

〈付言〉

本稿一〜五は『城西大学研究年報』に掲載するも、同年報廃刊により六以降を本誌に掲載することとした。